

黄体期卵巣刺激で採卵、体外受精を試みた周期に自然妊娠し生児を得た 1 例

徐クリニック ART センター

徐 東舜、伊藤 真理、峰 千尋、越智 雪乃、清須 知栄子

Luteal Phase ovarian Stimulation ;LPS（以下、黄体期卵巣刺激）で採卵、体外受精を試みた周期に自然妊娠し生児を得た症例を経験したので報告する。症例は年齢 39 歳、妊娠歴は G1P1、不妊歴 5 年。

（症例の前医での治療経過）2017 年に前医受診。子宮卵管造影を含む一般不妊検査を行い異常認めず、排卵誘発剤使用のタイミング療法を約 1 年実施も妊娠に至らず。

（当院での症例の治療経過）症例は 2019 年 10 月 2 日（最終月経 9 月 30 日）に体外受精目的で当院受診となる。受診時（day3）のホルモン検査は LH：3.4 mIU/ml、FSH：8.1 mIU/ml、E2：39.1 pg/ml、AMH：0.89 ng/ml、10 月 12 日（day13）右卵胞 20 mm、内膜 11.7 mm、尿中 LH+、10 月 16 日右卵胞の排卵確認し左右に 7-8 mm の胞状卵胞 5 個認めた。排卵時期での性交渉がないのを確認の上、AMH に比して多くの胞状卵胞を認めたため黄体期卵巣刺激での体外受精を提案して了解を得た。hMG300 単位を 5 日間投与、また排卵抑制に MPA1 日 10 mg を 2 日間投与した。10 月 21 日 18-20 mm の卵胞が 4 個、LH：3.6 mIU/ml、E2：709.0 pg/ml、P4：24.84 ng/ml となり同日の 21 時にオビドレル投与し 10 月 23 日の 9 時に採卵となった。採卵数は 4 個、体外受精で 4 個受精し、その中で 3 個胚盤胞（5BA, 4AB, 4BC）に発育し凍結した。月経を待ち次周期凍結融解胚移植を予定したが月経が来ず 11 日入院、経膈超音波で CRL2.2 mm、胎児心拍を確認。LH サージ翌日の 10 月 13 日を排卵日として妊娠 6 週 1 日、予定日 2020 年 7 月 5 日を確定させた。その後の妊娠状況は順調で 2020 年 6 月 27 日（38 週 6 日）、2850 g の女兒を経膈分娩し産科的合併症は認めなかった。その後、患者に再度排卵時期前に性交渉の有無を確認した所、明確ではないが性交渉があった可能性も否定できないという証言を得た。

（結語）黄体期卵巣刺激での体外受精を行う際は性交渉の有無を確実に確認する必要がある。